The Japanese Journal of Psychonomic Science
2016, Vol. 35, No. 1, 11–12
DOI: http://dx.doi.org/10.14947/psychono.35.2

書　評

D・マイヤーズ著，村上郁也訳
カラー版　マイヤーズ心理学
西村書店，2015

訳本は読みにくい。この常識というか経験則は本書によって覆された。この本を読めば心理学がよくわかるのである。

本書は心理学の教科書として出版されたのだから，心理学がよくわかるのは当たり前じゃないかと思うだろう。しかし，そうではないのだ。一般的に言って，訳本は読みにくいから挫折しやすい。このため心理学（に限らないが）がよくわからない。英語の原著で読めばよいのだが（若い者は元気があっていいのう），もっともっと挫折しやすい（まあ頑張れや）。

日本は，母国語が成熟し，外国語を母国語に自然に取り入れることができ，しかも教育によって全国津々浦々まで母国語が通じるというありがたい国なのだから，学問を母国語で習得できるに越したことはない（英語信仰も大概にせえよ）。日本には，「学問は高尚なことなのだから，教科書は読みにくくてあたりまえ」という難読＝高水準仮説というか苦行礼讃がある。昔はそういう苦行の信奉者が多かったような気がするが，今もなお舶来品（航空機に載ってくるから飛来品？）の教科書の方が自国の先生方が書いた教科書よりレベルが高いような気がしてしまう人はいる（筆者のことかもしれない）。そういった文明開化の気分を引きずるのもまた楽しではあるが，もうそろそろやめにして，よくわかる教科書で楽しいものだ。

ついでに言うと，本書は分厚い。693ページもある。たとえば，拙著「現代を読み解く心理学」（2005年，丸善）は188ページであるから，4倍近い。本書はお値段も高くて，9,500円＋税である。一方，拙著は2,100円＋税とお安くなっていますよおお，ちょっとそこのお兄さんとお姉さん。どちらがお買い得なのかは一概に言えない。日本の教科書は授業の中で内容の多くあるいはすべてを講義するつもりで執筆されているが，欧米ではそうではないらしい。「らしい」と推量なのは私は留学をしたことがないからなのであるが，彼の地では授業で教科書の一部しか講義せず，残りは自学自習するものらしい。しかも，講義していない部分も試験の出題範囲に含めるという。これが本当ならば，学生は授業外学習の時間は長いということになる。実際そうらしい。私もそう

しようかな。試験問題を作成する時に，授業で何をどう喋ったか思い出さなくてもよいから楽でもある。ただし，不合格者を毎年大量に出しても教員の責任は問われないということでお願いしますよ。

分厚いとよいことは，具体例を多く載せられることである。わかりやすくなるし，辞書的な使い方もできる。日本でもこういう教科書は出せると思うし，私が知らないだけですでに良書があるのかもしれないが，一冊が1万円近い値段となると，日本の出版社はおいそれとは企画できないのではないかなあ。あれやこれやで，この種の需要を満たすために舶来品（飛来品）に頼るのは自然な成り行きと言えよう。

ところが，冒頭に戻るが，訳本は読みにくいのである。この葛藤はどのように克服されるべきか，と喧々諤々の議論をしている（していないが）時に救世主のごとく心理学の世界に現れたのが，本書「カラー版マイヤーズ心理学」である。その秘密を探るのが本書評の使命である。

本書が読みやすいのは，まず，一人の著者によって書かれたものであることが大きい。複数の著者で分担執筆すると，編者の力量がよほどのものでなければ，表現の

Copyright 2016. The Japanese Psychonomic Society. All rights reserved.

統一が不十分だったり，内容の重複，偏り，不足が発生する。とは言え，一人で教科書を執筆するのは大変だ。網羅的に勉強して知識が豊富でなければ務まらない。マイヤーズ先生，すごいです。

本書の紹介文によれば，「デーヴィッド・マイヤーズ（David Myers）はアイオワ大学で心理学のPh.D.を授与された後，ミシガン州のホープ大学で教育に携わり，心理学入門を何度となく講義してきた。ホープ大学の学生は彼を卒業式の講演者に迎え，また投票により『卓越した教授』に選抜している」とのことである。この記述だけなら「勉強熱心で教えるのが上手な教師」という人物像を思い浮かべるところだが，「アメリカ国立科学財団の研究費を受けて行われたマイヤーズの科学研究の論文は，『Science』，『American Scientist』，『Psychological Science』，『American Psychologist』をはじめ30以上の科学雑誌に掲載されている」と続くものだから，研究者としても一流であることがわかる。

原著の執筆者がすばらしいことはわかった。原著もすばらしいのでありましょう。それでも，一般的に言って訳本は読みにくいのである。訳本である本書がこんなに読みやすい理由をあなたも知りたくありませんか？種明かしは次回の号にて，乞うご期待。

というのは冗談で，本書が良書なのは，多分に訳者（村上郁也先生）の力量による。この一人の訳者がすべてを日本語にしたことは大きい。執筆の場合と同様，複数の訳者で分担翻訳すると，編者の力量がよほどのものでなければ表現の統一が不十分となる。章によっては読む気が失せる。とは言え，一人でこのような大書を翻訳するのは大変だ。村上先生，すごいです。

さらに，ここが最も重要なことなのだが，この翻訳本は正しい日本語で綴られている。それがいかに難しいことか。直訳でも意味はわかるかもしれないが，読むことをいちいち意識させないでおくれ。著作物は日本語らしい日本語で読んで，その内容を流れるように自分の認知的スキーマやスクリプトに組み込んでいきたいものである。かと言って，意訳しすぎの日本語でもまずい。何しろ心理学の教科書なのだから。その絶妙なバランスを本書は見せてくれている。一種の職人芸だ。美しい。

翻訳であることを忘れさせてくれる流暢な日本語で書かれた本書で，心理学をすいすいマスターしよう。

（立命館大学総合心理学部　北岡明佳）